

Saio-ke House

Historical Architecture



齋尾家住宅

江戸時代から近代へ
——
住宅建築の歴史が息づく
齋尾家住宅が遺す意匠
県指定保護文化財

introduction

はじめに

北栄町国坂で12代続く齋尾家は、江戸時代には大庄屋を務めた家柄で、その建物は明治時代に建てられた蔵群や大正時代に建造された豪壮な主屋などからなり、建築当時の様式や意匠が良好な状態で保存されています。この齋尾家住宅に残る8つの建造物が、平成29年5月に北栄町内で初めて国登録有形文化財（建造物）に登録され、その後令和6年1月に県指定保護文化財に指定されました。

江戸時代の農家住宅の間取りを継承しながらも接客を意識して発展した近代住宅の特色が現れる主屋、歴史的な景観を美しく保つ門塀、大規模農家ならではの有り様を今に伝える蔵群など齋尾家住宅が伝える民家建築の歴史は大変貴重なものです。さらに、齋尾家住宅は建築当初からの改造が極めて少なく、建築物の多くに当時の普請資料（建物の建築工事に関わる記帳）が残されています。

代々に渡り受け継いでこられた建物を大切に扱い遺しておられる12代目当主齋尾正憲様、そして齋尾家の調査研究・文化財登録にご尽力いただいた小畑公寛様に、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

江戸時代から近代へ — 住宅建築の歴史が息づく 齋尾家住宅が遺す意匠

県指定保護文化財

contents

目次

2 齋尾家住宅の全体像

4 主屋に遺る住宅建築史の片鱗

6 開放を叶えるデザイン

8 対比する二つの間

10 蔵群

11 近代がもたらした建材

12 歴史を語る資料

13 年表

grasp the overall

齋尾家住宅の全体像

齋尾家住宅は、国坂集落にある茶臼山を背にする形で建てられています。

「主屋」は敷地中央にあり、「長屋門」は大規模な屋敷構えの正面に相応しい構えとなっています。この2棟の入口は、縁起の良いとされる東を向いています。「長屋門」を挟んで敷地を囲うように「南塀」「北塀」がそれぞれ連なっています。「長屋門」を通り抜けた玄関前の空間の南側には、庭園空間とを仕切る「露地門及び塀」を配し、

主屋一階表座敷から望む景観の一部としての役割も担っています。

敷地西側には、南北に長い「土蔵」に続くかたちで「南蔵」が建てられ敷地背面の景観を形作っています。また、「醤油蔵」「炭小屋及び味噌蔵」は食料等の保管の要として敷地北側に連続して建てられています。

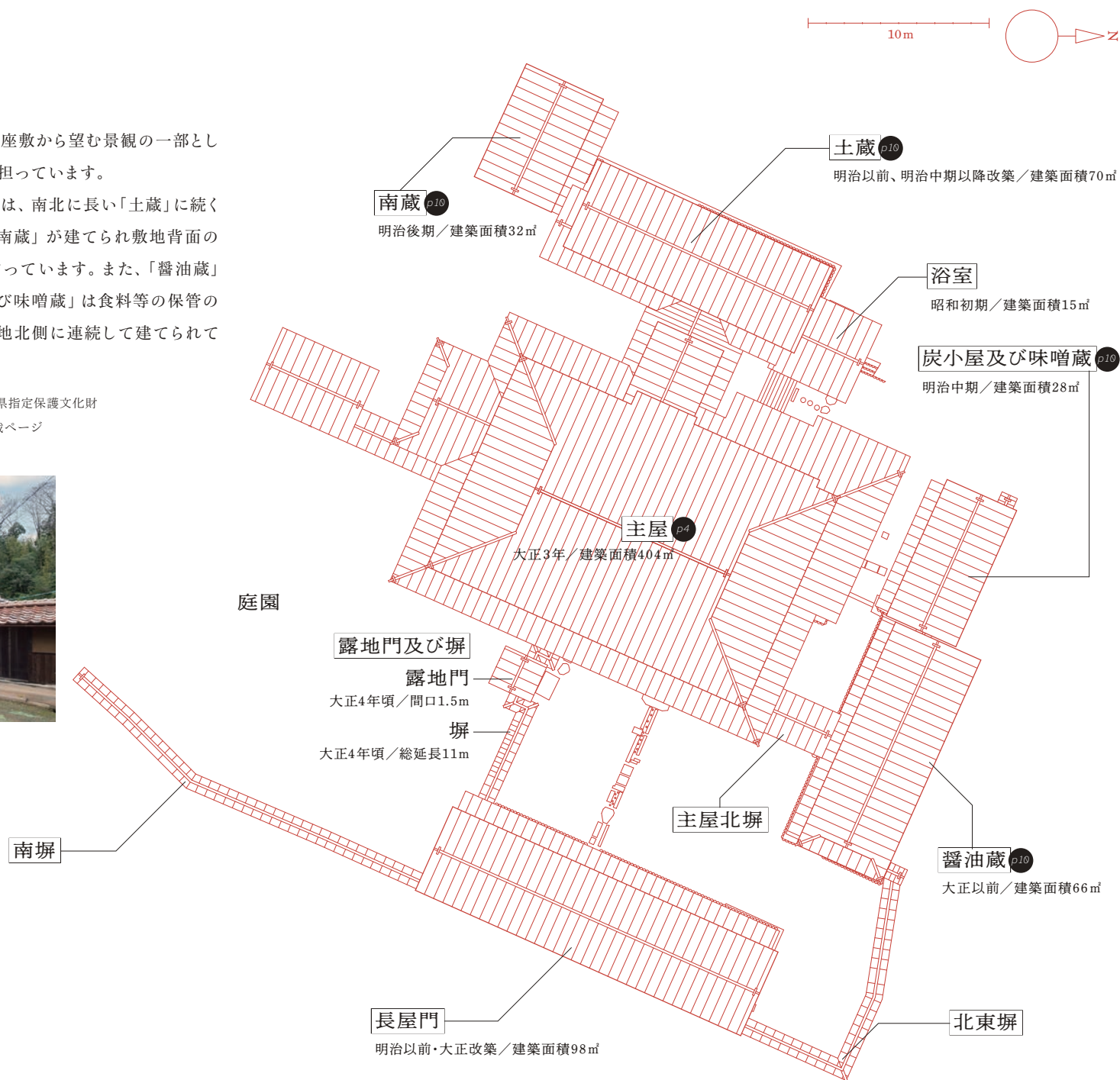
建造物名…県指定保護文化財

●p10…詳細掲載ページ



県指定保護文化財一覧

- 齋尾家住宅主屋
- 齋尾家住宅南蔵
- 齋尾家住宅土蔵
- 齋尾家住宅醤油蔵
- 齋尾家住宅炭小屋及び味噌蔵
- 齋尾家住宅浴室
- 齋尾家住宅長屋門
- 齋尾家住宅露地門及び塀
- 宅地（北東塀、南塀、主屋北塀含む）





glimpse of architectural history

主屋に遺る住宅建築史の片鱗

現存する「図板」「職工勤惰表」「材木表」などの普請時の資料から、齋尾家主屋は大正2年^{ふしん}に手斧始め^{ちようなはじ}（大工が新たな建築に取りかかる始めの日に行う儀式）と建前（棟上げ）を行った事が分かっています。大工棟梁は齋尾家からほど近い弓原集落の原田丈吉が務めました。原田家に伝わる「原田丈吉一代記」によると、丈吉は齋尾家住宅建築初期の50代半ばに妻を亡くし、この頃から華美な建築を改めたと記されています。そのためか、齋尾家は、銘木を多用しながらも繊細で上質な落ち着いた空間にまとめられています。

主屋の特徴として、従来の農家住宅で多く見られる作業用の広い土間を配した出入口ではなく、狭い土間の出入口の隣に公式の出入口である上客用の式台玄関^{しきだいげんかん}の存在があげられます。ここから農作業重視だった従来型の農家住宅からの脱却が図られたことがうかがえます。また、接客用の空間と家族の居住用の空間を中廊下で隔てて各室の独立性を高めていることや、多彩な銘木を要所に用い部屋毎に異なる意匠で趣向を凝らすなど接客空間へのこだわりが見られ、各所に近代住宅の要素を感じることができます。



1) 土間左手のゲンカンからに備わる上客用の式台玄関^{しきだいげんかん}。8畳の玄関間は天井板以外の材が樺で統一されている。

2) 土間と座敷の境に立つ樺の大黒柱^{けやき}。柱の太さは末広がりで縁起の良いとされる8寸8分（約27cm）で、子孫繁栄などを願う当主の思いが込められていることがうかがえる。ゲンカン側の建具は樺の一枚板が使われている。



grasp the overall

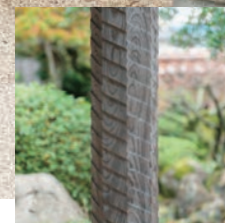
開放を叶えるデザイン

庭園をよりよく見せるため、表座敷縁側は、おもてぎしきえんがわ雨戸通りから外側に離して5寸3分(約16cm)の栗材の柱を立てています。これはこの地域の有力者の間で明治末期から昭和初期に流行した手法で、齋尾家では柱の断面を八角形とし、根元のデザインとあわせて洋風な印象を与えています。建築当時の柱は3寸6分(約11cm)で現在のものより約5cm細いものであり、柱を極限まで細くすることでオモテから美しい庭園を鑑賞する際、視界を遮らない工夫がされていました。

当時、大工棟梁の原田丈吉が三徳山へ研究に出かけたという記録が残っています。齋尾家の縁側の柱は、太い柱を細く優美に見せるため大面取りによって八角形となった三仏寺投入堂の柱を意識して製作されたのかもしれません。



縁側から庭へはみ出るかたちで立てられた2本の柱。八角形の柱の表面全体をぐるりと囲むなぐり仕上げ(斜めの線状模様)が美しい。



Two distinctive rooms

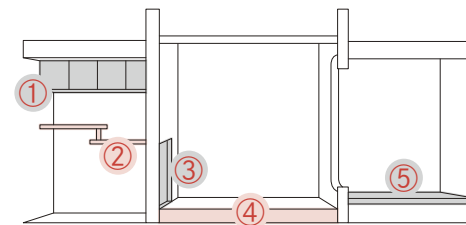
対比する二つの間

主屋の2階には、樹種や造作が異なった白と黒の対照的な2つの座敷があります。

それらはシロキノマとクロキノマと呼ばれ、シロキノマは齋尾家住宅の座敷のなかで最も格式高い造りをしています。天井の廻り縁・竿・鴨居・長押・柱・違い棚・天袋・狛潜りなどに白色を基調とした材である桧を多用し、格式を現す黒漆の床框と、木目を生かした濃い赤茶色の拭き漆の琵琶床が、白い桧とのアクセントになっています。

一方のクロキノマは、天井材・鴨居・長押・柱などを木の皮を残した面皮杉とし、それに松煙墨を塗った黒色を基調とした材を用いています。柱はあらかじめ大きく面を取り、その部分に面皮材を貼ることで面皮柱としており、手間と趣向が凝らされています。そして、シロキノマ同様にアクセントとして、床柱と落し掛けには白木の銘木を使い、床框は特徴的な木目が映える黒柿、地袋と琵琶床には赤茶色の拭き漆で仕上げるなど、独特の美意識を感じさせる空間となっています。

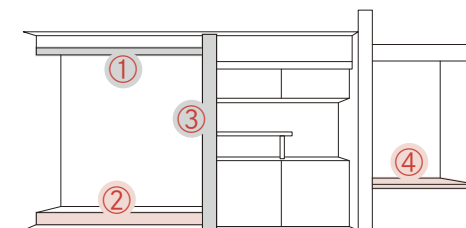
また、これらの座敷には2本のい草を中央で継いで織る中継ぎ表の畳が現存しています。何代にもわたり大切に扱われたこそ残る貴重なものです。



①天袋 ②違い棚 ③狛潜り ④黒漆の床框 ⑤拭き漆の琵琶床



座敷全体に縮み歪が特徴的な桧の白木(素木)材がふんだんに使われ、黒漆塗りの床框、拭き漆の琵琶床が対比となっている。



①落し掛け ②黒柿を使った床框 ③白木の床柱 ④拭き漆の琵琶床



座敷全体に松煙墨を塗った黒色の面皮杉を使用し、床柱には対照的な白木の銘木を、床框には木目が際立つ黒柿を用いている。

warehouses

蔵群

齋尾家に残る蔵は、普請の古い順に「土蔵」「炭小屋及び味噌蔵」「南蔵」「醤油蔵」の4つがあります。

大正3年に主屋が普請される前の、明治中期から大正初期にかけて約30年にわたって次々と建てられたとみられ、築100年を超えたこれらの蔵群は齋尾家住宅の文化財的価値を語る上で大変重要な建造物です。

「土蔵」は2階建て、1階の壁板に墨書きがあり、寛政8年に瀬戸集落の大工が板張りに携わった事が記されています。また、明治25年以降の家相図ではこの土蔵棟が東西に描かれており、ほかの資料からも明治30年に曳家によって現在の場所に移築し、外廊下と庇を増築したことが分かっています。

「炭小屋及び味噌蔵」は、土塗りの壁と三和土の土間を持つ平家で、昔から主に炭や味噌など炊事に欠かせない材料を収納していました。

「南蔵」は「土蔵」を移築したのちの明治35年頃に着工した2階建ての蔵で、1階の床板や蔵全体の柱に栗材を用い、床下には玉石が敷き詰められるなど様々な箇所丁寧な仕事を見ることができます。

齋尾家の蔵で最も新しい大正期以前に建てられた「醤油蔵」は土塗りの真壁と三和土の土間を持つ平屋の建物です。

齋尾家には、これらの現存する蔵だけでなく、明治から大正にわたって数多くの建物が建てられていた記録が残っています。



timber delivered by transport

近代がもたらした建材

齋尾家の建材には、日本の銘木だけでなく、東南アジア原産の紫檀や鉄刀木といった外国産の銘木が使われています。明治末期に山陰に開通した鉄道によって、様々な木材を取り寄せることが可能となった時代背景をうかがうことができます。

主屋のゲンカンと表座敷を隔てる鴨居には、各部屋面で違う2種の材を継いでおり高度な技術とこだわりが見られます。ほかにも、庭園を望む奥のオモテには床柱に皮付きの鉄刀木を使うなど、齋尾家全体で10種類を超える木材を用途やデザインによって巧みに使い分けています。

齋尾家住宅に使われた木材の種類

国内産の木材

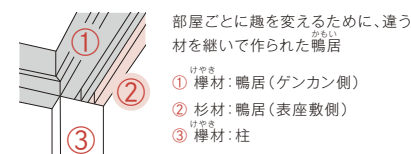
松 マツ	杉 スギ	欅 ケヤキ
翌檜 アスナロ	栗 クリ	桜 サクラ
栃 トチ	樫 カシ	朴 ホオ
柿 カキ	槐 エンジュ	梅 ツガ
楓 カエデ	桐 キリ	竹 タケ

外国産の木材

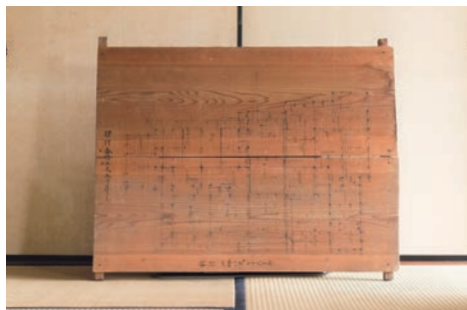
鉄刀木 タガヤサン	紫檀 シタン
-----------	--------

上記に材種不明の6種を加えた、計23種に及ぶ

- 1) 土蔵は明治以前に建てられ、その後曳家によって現在の場所に移築された。
- 2) 南蔵には各階に押入れが設けられ、1階と2階で襖紙は同じだが、引手金物を使い分けられている。
- 3) 南蔵外壁の上部には梁の木口を隠すような真円型に装飾のない漆喰が盛り上げられている。



オモテの床柱に使われた皮付きの鉄刀木は、熱帯原産の希少価値が高い高級銘木。非常に重く硬い木で、緻密な材質から紫檀・黒檀と並び「唐木三大銘木」と呼ばれる。



主屋の普請に関する資料。

上) 十二支方位で記された「家相図(明治28年)」

下) 木板上に詳細な寸法が記された「図板」

普請に関する資料。

左) 「普請修繕二關スル材木其他買入帳(明治40年)」

中) 「本宅新築大工勤情總計表(大正2年)」

右) 「本宅新築職工勤情表(大正3年)」



historical records of architects

歴史を語る資料

齋尾家には、新築や移築・改築時の記録となる普請資料が数多く保管されていたことで、棟上の時期や移転・修繕などの年代が明らかになりました。

主屋に遺る「職工・大工勤情表」や「材木買入表」からは職人の職種や人数、勤務形態から、材木の買入状況まで把握することができます。また、現代の建築図面に相当する図板は、紙だけでなく木板上に記されたものも現存しています。

chronology

年表

西暦	元号	齋尾家住宅	国内
1912	明治以前 明治元年	土蔵、長屋門	1868・慶応4年9月／「明治」に改元 1881・明治14年／鳥取県が再置 1885・明治18年／初代総理大臣に伊藤博文 1889・明治22年／東海道線全通
1883—1897	明治中期	炭小屋及び味噌蔵	
1898—1912	明治後期	南蔵	1904・明治37年／日露戦争勃発 1908・明治41年／山陰西線「米子 - 鳥取」間の鉄道が開通 1912・明治45年／山陰線「京都 - 出雲今市」間の鉄道が全通
1912	大正以前 大正元年	醤油蔵	1912・明治45年7月／「大正」に改元
1914	大正3年	主屋	1914・大正3年／第1次世界大戦勃発
1915	大正4年	露地門及び塀	1918・大正7年／第1次世界大戦終結
1926	昭和元年		1926・大正15年12月／「昭和」に改元
1926—1945	昭和初期	浴室	1939・昭和14年／第2次世界大戦勃発 1955・昭和30年／大栄町が発足

見学について

○年に2回限定公開を行っております。(要予約)

○上記以外は原則非公開です。

お問い合わせ

北栄町教育委員会事務局生涯学習課

〒689-2292 鳥取県東伯郡北栄町由良宿 423-1

TEL 0858-37-5871

FAX 0858-37-3242

第一版 令和5年3月

第二版 令和6年3月

発行…北栄町教育委員会